

批評と研究の界面

一 はじめに

文学研究と批評とは異なる論述スタイルを持つが、ときにクリティカルな研究が目を引き、実証的な批評も展開されることもある。研究と批評の界面とは言語であり、方法である。

さて、日本近代文学研究の文脈において批評との関係を問う試みがこれまで幾度となくなされてきたが、本節では雑誌特集からそれを概観する。

日本近代文学会の機関誌『日本近代文学』で批評と研究が特集テーマとなったのは二回ある。一九七六年一〇月の「研究と批評の接点」特集と、一九九四年一〇月の「研究・批評のパラダイム」特集である。

「研究と批評の接点」特集では、荒正人「夏目漱石の研究と批評」と、前田愛・谷沢永一・磯田光一の「シンポジウム批評と研究の接点」、司会者であった吉田瀬生の「後記」、鳥居邦朗・高田瑞穂・木村幸雄「シンポジウムをめぐって」からなる。

西田谷 洋

荒は「人間は、危機に臨んで、判断をし、決定するから」
「研究と批評は、本質的に対立する概念であるか、どうかは断定でき」ないと指摘し、「研究と批評の統一は、少しづつ実現すると思う」とまとめる。シンポでは前田愛が専門家意識の落とし穴として文学主義・教養主義・文献実証主義が作品を解釈によつて作品論・作家論・文学史という「陳列ケース」に収まるようなものに「飼いやらしてしまふ」ことに警鐘を鳴らし、文学を「いろんな文化的コードの中の一つのもの」とすることで「批評と研究の接点」を模索する。谷沢永一は、「過去に書かれた作品を現代の観点から勝手気儘に判断してはなら」ず「歴史的臨場感を可能なかぎり身につけるよう努力すべき」として、自己の行文や「近代社会」への検証のない越智治雄の主観的な「読み方」を否定する。磯田光一は「社会科学の裁断に対する」「抵抗という意味を」「歴史の一駒として忘れてはいけない」が、「研究も批評も最終的には主観の神話」としても「主観は自己検証」が必要と説く。